２０１３年度　修士論文

わが国における
ビーチバレーボール振興策に関する研究

Vision for Beach Volleyball Promotion in Japan

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻　トップスポーツマネジメントコース

５０１３Ａ３０２－１

朝日　健太郎

研究指導教員：　平田　竹男　教授

目次

第 1 章　序論 1
第 1 節 1
第 1 項　研究動機 1
第 2 項　日本におけるビーチバレーの歴史 1
第 3 項　FIVB とオリンピック 3
第 4 項　2020 年東京五輪開催 4
第 2 節　先行研究 6
第 3 節　研究目的 6
第 2 章　研究方法 7
第 1 節　世界におけるビーチバレー構造分析 7
第 1 項　FIVB 主催大会実施状況 7
第 2 項　ジュニア育成と五輪成績に関する調査 7
第 2 節　日本、および海外ビーチバレー選手へのアンケート調査 7
第 1 項　対象者 7
第 2 項　アンケートの内容と方法 7
第 3 項　分析方法 7
第 3 節　ビーチバレーオリンピック出場選手へのアンケート調査 8
第 1 項　対象者 8
第２項　アンケート方法と内容 8
第 3 項　分析方法 8
第 4 節　日本、中国、オーストラリアについてのビーチバレー組織比較 9
第 1 項　文献による各国ビーチバレー組織運営について比較分析 9
第 2 項　日本、および中国における強化プランについての比較分析 9
第 5 節　日本ビーチバレー連盟関係者へのインタビュー調査 9
第 1 項　対象者と方法 9
第 2 項　分析方法 9

第 6 節　日本におけるビーチバレー情勢に関する調査 9
第 1 項　川崎マリエン施工担当者へのインタビュー調査 9
第 3 章　研究結果 10
第 1 節　世界各国におけるビーチバレー動向 10
第 1 項　ビーチコート設置状況 10
第 2 項　海外ビーチバレー選手におけるビーチコート利用状況 12
第 3 項　ロンドンオリンピック出場選手におけるジュニア大会経験 13
第 4 項　海外ビーチバレー選手における競技意識 16
第 5 項　Xue 選手（中国）へのアンケート結果 18
第 2 節　日本におけるビーチバレー状況 19
第 1 項　日本のビーチバレー選手経歴 19
第 2 項　オリンピック出場経験のある日本人選手の意識調査 21
第 3 節　ビーチバレー組織分析 25
第 1 項　三カ国比較 25
第 2 項　中国との強化策の比較 27
第 4 節　ビーチバレー連盟関係者インタビュー結果 29
第 1 項　日本ビーチバレー連盟におけるこれまでの方針 29
第 2 項　トップチームに関する施策 29
第 3 項　選手へ対する保障 30
第 4 項　ビーチバレー選手発掘、育成に関して 30
第 5 項　国際大会誘致、および国内プロ大会開催について 31
第 6 項　2020 東京へ向けたビーチバレー育成、強化について。 31
第 5 節　ビーチコートと環境に関する調査 32
第 1 項　国内における全国大会出場手の環境への意識アンケート調査 32
第 2 項　川崎マリエンビーチコート事例インタビュー結果 34
第 4 章　考察 37
第 1 節　ジュニア世代の海外強化とインドアバレーとの共存 37

第 2 節　魅せるプロ選手の醸成. 38
第 3 節　資金獲得による組織強化. 39
第 4 節　ビーチコートが与える環境への好影響. 39
第 5 章　結論 41
第 6 章　謝辞 41
第 7 章　引用、参考文献 43

図 1　日本における競技人口 1
図 2　ビーチバレーボール世界ランキング日本チームの推移 4
図 3　2012 年世界各国におけるビーチバレー大会開催数、および賞金総額 5
図 4　日本におけるビーチバレーコート設置状況 5
図 5　FIVB ワールドツアー開催地状況 10
図 6　内陸部会場 11
図 7　沿岸部特設会場 11
図 8　自然海浜会場 11
図 9　2012 ロンドン五輪出場選手における、ジュニア世界選手権出場実績（n -48）
..... 13
図 10　2012 ロンドン五輪出場選手のうち、 14
図 11　過去 10 年間のジュニア世界選手権出場国における、2012 ロンドン五輪成績
..... 15
図 12　ビーチバレー選手が重要と感じる、インドアバレーでの経験(n-50) 16
図 13　ビーチバレー選手における、強化に関して必要と思う要素について(n-50) .. 16
図 14　ビーチバレーを始めたきっかけ(n-50) 17
図 15　21 歳以下選手における、インドアバレー経験率(n-81) 19
図 16　ビーチバレー日本選手権出場選手における、インドアバレー経験率(n-177) 19
図 17　21 歳以下の選手における海外大会参加経験率(n-81) 20
図 18　ビーチバレー日本選手権出場手における海外大会参加率(n-177) 20
図 19　ビーチバレーでの国内五輪出場選手におけるインドアバレー歴の内訳 23
図 20　五輪出場選手における、シーズン大会参加数 23
図 21　ビーチバレーを始めてから、環境へ対する意識に変化はありましたか？ 32
図 22　ビーチバレー競技時に清掃活動をしている。 32
図 23　ビーチコートに求める条件 33
図 24　川崎マリエン施設写真 34
図 25　川崎マリンビーチコートにおける利用価値 40

表 1　バレーボール協会登録選手内訳 2
表 2　ビーチバレーボール日本チーム五輪成績 3
表 3　世界におけるビーチバレーボール運営組織図 3
表 4　2012 年ビーチバレーボール世界ランキング 4
表 5　国内におけるビーチバレーオリンピック出場選手 8
表 6　Xue 選手プロフィール 8
表 7　オリンピック出場選手アンケート内容 8
表 8　インタビュー項目（2013 年 12 月実施） 9

表 9　インタビュー項目（2013 年 9 月実施） 9
表 10　海外におけるビーチバレーコート設置個所別利用状況.....12
表 11　Xue 選手のビーチバレーでの目標、動機 18
表 12　Xue 選手のビーチバレーの競技に対する見解.....18
表 13　ビーチバレーを始める理由.....21
表 14　選手としての目標、動機.....21
表 15　日本の強化に関しての意見.....22
表 16　砂を使用する競技について.....22
表 17　ビーチバレーの特性.....22
表 18　海外強化の重要性.....24
表 19　3 か国における競技団体の資金について 25
表 20　過去の資金に関する流れ.....26
表 21　競技団体における施策後の資金流入の変化.....26
表 22　海外との強化策比較.....28
表 23　日本ビーチバレーのこれまでの方針.....29
表 24　トップチーム強化に関する実施施策.....29
表 25　選手に対する保障に関する施策.....30
表 26　選手発掘、育成に関する施策 30
表 27　大会開催について.....31
表 28　2020 東京に向けた日本ビーチバレーの今後 31
表 29　川崎マリエン施設概要.....34
表 30　川崎マリエン設置までの経緯.....35
表 31　川崎マリエン利用目的.....35
表 32　川崎マリエン利用状況.....35
表 33　川崎マリエンの今後の活用.....36

第 1 章　序論

第 1 節

第 1 項　研究動機

筆者はインドアバレーボール選手時代、企業チームに所属しナショナルチームでも活動をする。その中で2000年のシドニーオリンピックでは世界最終予選で敗戦し出場権逃した。その悔しさとオリンピックへの挑戦を決意し、2002 年、企業チームを退団後ビーチバレーボール選手へ転向しプロスポーツ選手となる。そしてビーチバレー日本代表として 2008 年北京、2012 年ロンドンと 2 度のオリンピック出場を果たした。ここで経験したビーチバレー競技会場での試合は大いに盛り上がり、大観衆の中でプレーできた事に感動を覚えた。2012 年シーズン終了後、筆者は現役を引退する。25 年余りの競技人生の中でビーチバレーの経験から二つの大きな財産を得ることができた。一つは、アスリートとしてトップスポーツとしての価値を追求し自分自身を高められたこと。もう一つは、ビーチという砂の上で自然を直に体感しながら競技を続けたことによって、心身ともに好影響を受けることができたことである。そこで、ビーチバレーボールに焦点を当てた研究をしようと考えるに至ったのである。

第 2 項　日本におけるビーチバレーの歴史

日本体育協会への加盟団体の中で、バレーボール競技（インドアバレー含む）は 4 番目に競技人口が多い種目である（図 1）。過去、1964 年東京五輪で女子バレーが金メダルを獲得するなど、以降、人気スポーツとして認知されてきた。

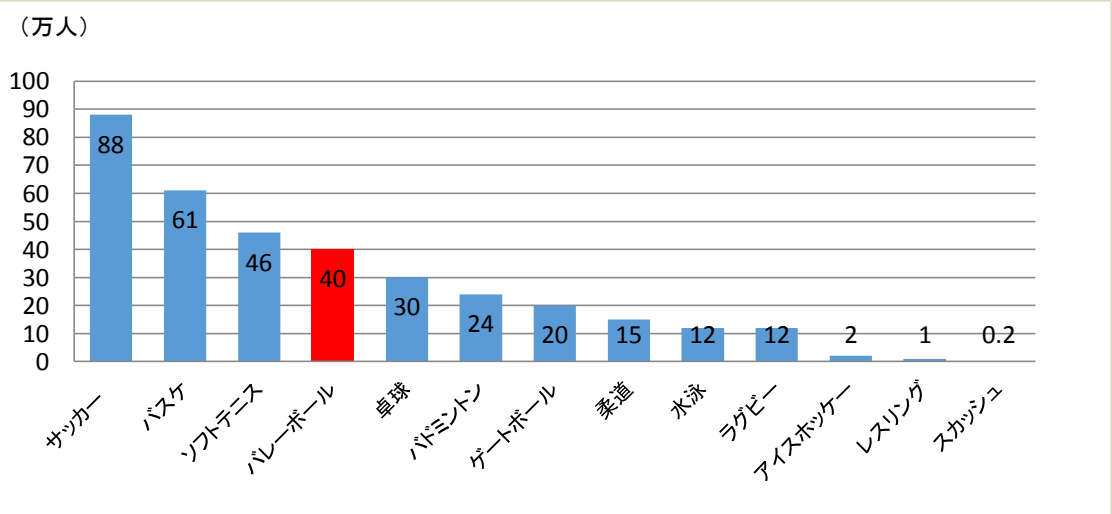

図 1　日本における競技人口

しかし、90 年代よりトップチームの低迷を始め、バレーボール自体の競技人口は減少傾向にある。男子バレーにおいては五輪出場を逃し、かつ実業団チームの撤退などインドアバレー全体の規模が縮小している。一方、現在のバレーボール選手層は、中学校、高校での部活動での競技人口が多い（表 1）。高校生においては、春の高校バレー、夏のインターハイ、国体など、各都道府県予選を含む大会が主戦場となっている。その中で、2012 年ロンドンオリンピックでは全日本女子バレーチームが銅メダルを獲得するなど、日本バレーボール界において良い結果が出たことは今後に期待できるであろう。

表 1　バレーボール協会登録選手内訳

	男子	女子	合計
実業団	6477 人	1271 人	**7748** 人
クラブ	18148 人	11155 人	**29303** 人
大学	6870 人	7089 人	**13959** 人
高専	1091 人	535 人	**1626** 人
高校	39591 人	62207	**101798** 人
中学校	34268 人	94275 人	**128543** 人
小学校	13908 人	79407 人	**93315** 人
ヤングクラブ	894 人	1157 人	**2051** 人
U１４	575 人	96 人	**671** 人
ソフト	9074 人	11020 人	**20094** 人
ビーチバレー	738 人	484 人	**1222** 人
合計	**131634 人**	**268696** 人	**400330** 人

一方、ビーチバレーボール（以下ビーチバレー）が日本で行われるようになったのは 1980 年代からで、国内においてはまだ歴史の浅い競技であると言える。当時は、専門のビーチバレー選手というのは存在しておらず、インドアバレーボール（以下インドアバレー）選手が夏の間だけプレーする、いわばレクレーション的競技であったが、1990 年代に入りビーチバレー専門の選手が誕生する。

1996 年アトランタオリンピックよりビーチバレーが正式種目となり、日本男子からは瀬戸山／高尾組（19 位）、女子からは高橋／藤田組（5 位）、中野／高橋組（9 位）が初出場を果たした。2000 年シドニー大会では、女子チーム高橋／佐伯組が 4 位入賞と大活躍をみせた。（表 2）日本でもこの時期からビーチバレーが認知をされ始め、2005 年ごろから浅尾美和選手がメディアに大きく取り上げられるなど、国内でも一気に認知を高めた。

表 2　ビーチバレーボール日本チーム五輪成績

	男子	女子	
2012 ロンドン	朝日・白鳥組（19 位）	出場なし	
2008 北京	朝日・白鳥組（9 位）	佐伯・楠原組（19 位）	
2004 アテネ	出場なし	徳野・楠原組（17 位）	
2000 シドニー	出場なし	高橋・佐伯組（4 位）	石坂・清家組（19 位）
1996 アトランタ	瀬戸山・高尾組（19 位）	藤田・高橋組（5 位）	石坂・中野組（9 位）

第 3 項　FIVB とオリンピック

現在、世界のビーチバレーはオリンピックを頂点とした大会運営が行われている（表 3）。IOC が管轄するオリンピック、国際バレーボール連盟（FIVB）が主催するワールドツアー世界選手権をはじめ、賞金、加算ポイントに応じて、グランドスラム、オープン大会、アンダーエイジといったカテゴリーで開催されている。さらに、各大陸においてコンチネンタルカップと称して、各大陸のバレーボール連盟主催で大会が開催されている。日本で開催されている JVB ツアーは最下層のナショナルツアーに位置づけされる。4 年に 1 度開催されるオリンピックへの出場枠は男女各 24 チームであり、各国最大で 2 チームの出場が認められている。世界ランキングをみると、アメリカ、ブラジルの上位国を始め、近年ではオランダ、ラトビア、ポーランドなどが成長を見せている（表 4）。しかし日本はここ数年著しく結果を下げている。2000 年シドニー五輪の女子 4 位以降、FIVB 主催大会の中で日本のレベルは向上していない（図 2）。

表 3　世界におけるビーチバレーボール運営組織図

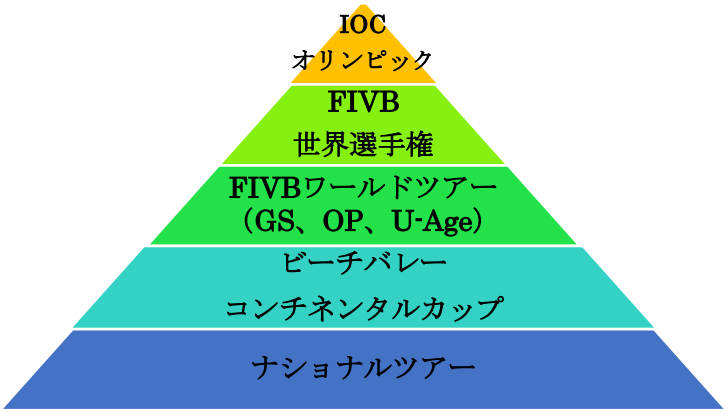

表 4　2012 年ビーチバレーボール世界ランキング

	男子	女子		男子	女子		男子	女子		男子	女子		男子	女子
1	USA	BRA	11	LAT	RUS	21	CZE	CZE	31	BRA	ITA	41	RUS	GER
2	BRA	CHN	12	BRA	USA	22	GER	GER	32	NOR	SUI	42	GER	GER
3	USA	BRA	13	GER	BEL	23	AUT	BRA	33	GEO	SUI	43	CAN	NED
4	BRA	USA	14	NED	NED	24	POL	BRA	34	RUS	BRA	44	GER	VAN
5	NED	ITA	15	POL	ESP	25	GER	BRA	35	ITA	GER	45	BRA	NED
6	BRA	GER	16	ESP	AUS	26	AUT	FIN	36	FRA	CZE	46	ESP	MEX
7	USA	SUI	17	SUI	AUS	27	SUI	AUT	37	AUT	KAZ	47	AUT	USA
8	GER	NED	18	CHN	AUT	28	BRA	CAN	38	SWE	NED	48	NED	JPN
9	LAT	CZE	19	KAZ	RUS	29	NZL	USA	39	CAN	GER	49	AUT	CAN
10	ITA	GER	20	GER	GRE	30	NOR	SVK	40	CHN	USA	50	POL	ENG

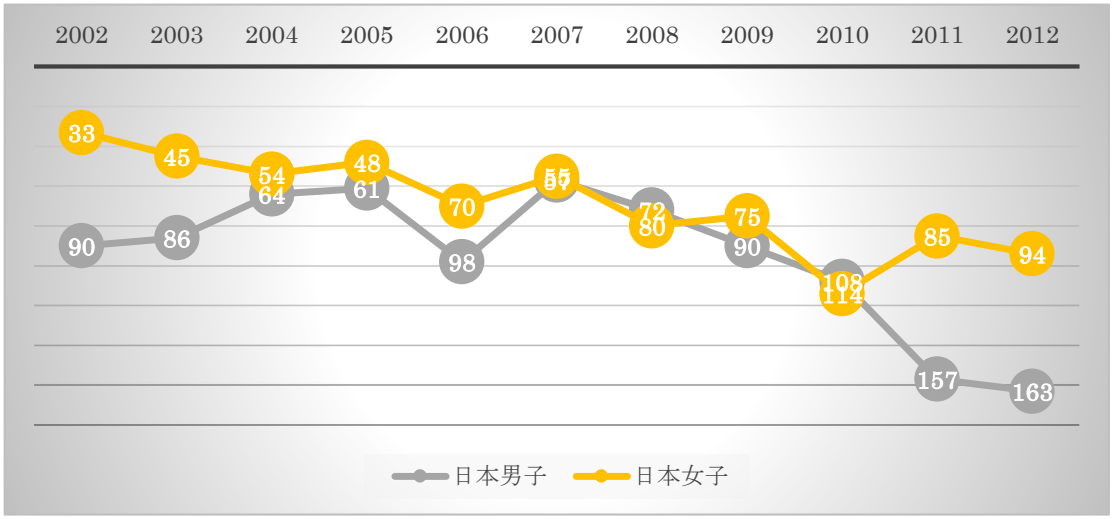

図 2　ビーチバレーボール世界ランキング日本チームの推移

第 4 項　2020 年東京五輪開催

日本時間 2013 年 9 月 8 日早朝、IOC 総会において 2020 年オリンピック開催地が東京に決定した。その瞬間、東京はもとより日本中が歓喜の渦に包まれたのは記憶に新しい。
オリンピックで活躍する日本のビーチバレーをこの目でぜひとも見てみたい。ビーチバレーは、オリンピックで過去 5 大会しか開催されていない。しかし、1996 年五輪種目に採用されてから、世界でのビーチバレー普及は飛躍的に向上するが、日本では順調な普及は進んでいない。ビーチバレー競技の普及を考えたときに指針となる条件は、

１、トップ選手参加の賞金大会の開催

２、ビーチコートの施設数

３、国内における振興策

が挙げられる。現在日本では、図３に示すように年に数回の賞金大会の開催と、日本に設置されているビーチコートの大半は自治体が設営する公共のコート（図４）が、常設、またはシーズンを限定した仮設のビーチコートが存在しているだけである。国内のビーチバレー競技は、バレーボール協会が所管するビーチバレー連盟が組織運営を行い、ナショナルチームの強化、普及や選手発掘などの施策を行っている。

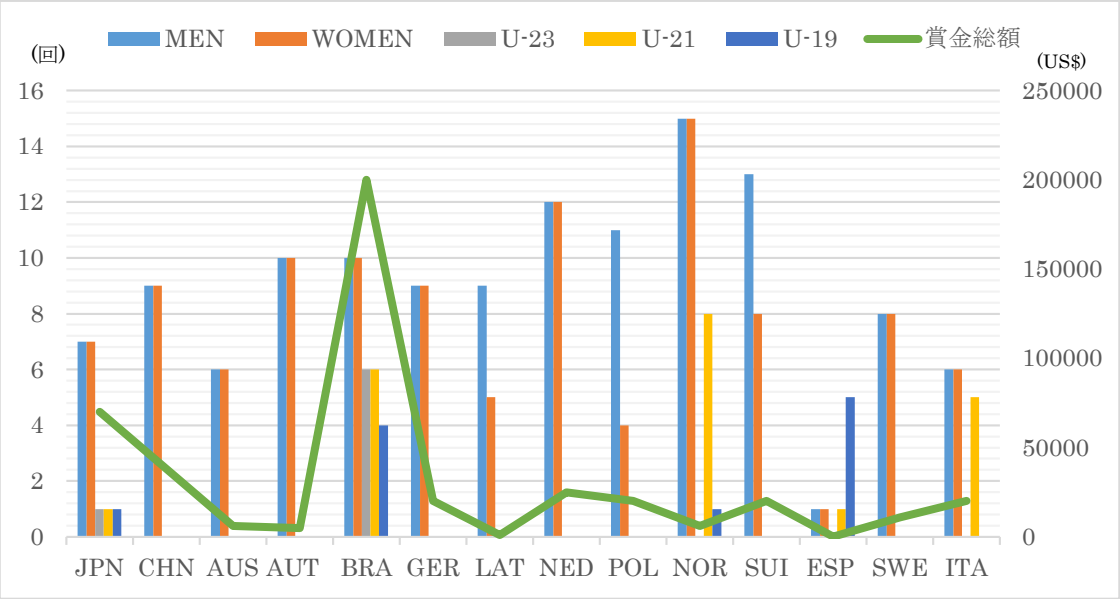

図 3　2012 年世界各国におけるビーチバレー大会開催数、および賞金総額

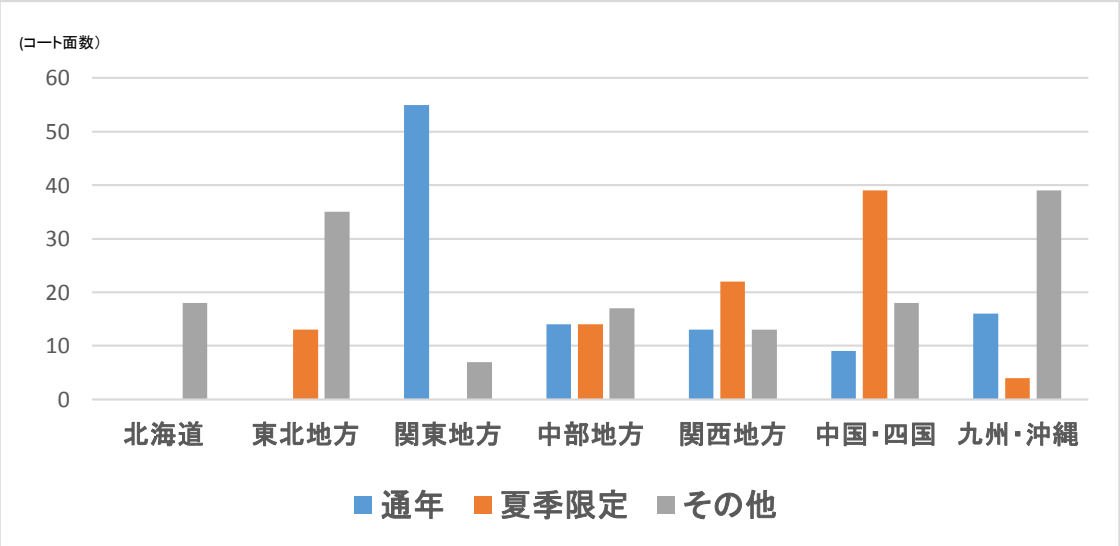

図 4　日本におけるビーチバレーコート設置状況

第 2 節　先行研究

日本おいて、ビーチバレーに関する研究では、砂の上でのジャンプ力や、持久力といった体力的研究（森田ら 1997）が存在している（1）。その他には、床のバレーボールと、砂のビーチバレーで身体的特性に大きな違いを検証した運動生理学のレポート（NSCA2008）が存在している（2）。一方、中国では 2008 年北京五輪開催へ向けた強化体制の研究（董立、2006）や、ビーチバレーの技術的、戦術的研究（李世明 2005）が存在しているが（3，4）、日本ではインドアバレーにおいてのチームマネジメント強化に関する研究（大久保ら、2009）は存在しているが、ビーチバレーにおいては強化、普及といったものに関する研究は行われていない（5）。

第 3 節　研究目的

本研究の目的は、日本ビーチバレーボール界発展に向けた振興策を明らかにすることである。

第 2 章　研究方法

ビーチバレー競技において、世界におけるビーチバレー競技構造、各国競技組織調査、日本におけるビーチバレー環境の 3 要素に関して研究を行う。

第 1 節　世界におけるビーチバレー構造分析

第 1 項　FIVB 主催大会実施状況

過去 10 年間、FIVB の開催するワールドツアー会場の立地状況を 3 種類（沿岸部、内陸部、特設）に分類し、開催実績を調査した。

第 2 項　ジュニア育成と五輪成績に関する調査

2012 年ロンドン五輪男子出場選手の五輪順位と、当該選手によるジュニア世界選手権出場の相関関係の調査を行った。

第 2 節　日本、および海外ビーチバレー選手へのアンケート調査

第 1 項　対象者

日本国内で活動する男女の高校生、大学生、一般の全国大会出場資格を持つ選手。次に海外のプロ、およびアマチュアビーチバレー選手を対象にアンケート調査を実施した。

第 2 項　アンケートの内容と方法

日本選手に対しては、それぞれのカテゴリー大会においてアンケート用紙を配布し、記述式で行った。内容は基本属性、競技意識、および環境への意識に関するものである。

海外選手に関しては、インターネットサーベイを利用し、ビーチバレーコミュニティサイトを使い公募した。内容に関しては、①選手スキルおよび能力について。②ビーチバレー競技に必要な条件、および施策。③トレーニングに関する条件について実施した。

第 3 項　分析方法

回答を単純集計した後、日本選手に関しては年代別の集計比較、海外経験の有無の集計比較を実施した。海外選手に関しては、競技に対する意識、競技環境に関して比較分析を実施した。

第３節　ビーチバレーオリンピック出場選手へのアンケート調査

第１項　対象者

ビーチバレーでオリンピック出場経験のある日本選手７名（表 5）、2008 年北京、2012 年ロンドンオリンピックに中国代表で出場した Xue 選手（表 6）を対象に行った。

表 5　国内におけるビーチバレーオリンピック出場選手

高橋有紀子（1996 アトランタ、2000 シドニー）	徳野涼子（2004 アテネ）
楠原千秋（2004 アテネ、2008 北京）	佐伯美香（2000 シドニー、2008 北京）
瀬戸山正二（1996 アトランタ）	高尾和行（1996 アトランタ）
白鳥勝浩（2008 北京、2012 ロンドン）	

表 6　Xue 選手プロフィール

Chen　Xue 選手（中国）
1989 年生まれ。12 歳よりバレーボールを始め、14 歳よりナショナルチームで活動。2008 北京五輪では銀メダル、2012 ロンドン五輪では 4 位の成績を収める。2011 年シーズンでは世界ランキング 1 位を獲得している。

第２項　アンケート方法と内容

日本選手に対しては、アンケート用紙のメール送信、およびＦＡＸ送信で実施した。Xue 選手に対してはインターネットメールでのアンケートを実施した。内容に関しては表 7 の通りである。

表 7　オリンピック出場選手アンケート内容

① 競技を始めたきっかけ
② ビーチバレー選手としての目標
③ ビーチバレー強化に関して必要と思う施策
④ 砂を利用する競技についての見解
⑤ ビーチバレーの競技特性

第３項　分析方法

それぞれ自由記述で回答された内容からコードを抽出し、その中で最も重要だと考えている要素をキーワードとして抽出し比較を行った。

第 4 節　日本、中国、オーストラリアについてのビーチバレー組織比較

第 1 項　文献による各国ビーチバレー組織運営について比較分析

第 2 項　日本、および中国における強化プランについての比較分析

第 5 節　日本ビーチバレー連盟関係者へのインタビュー調査

第 1 項　対象者と方法

日本ビーチバレー前連盟理事長へ、以下の表 8 の示す内容について、対象者と研究者 1 対 1 の半構造的インタビューを実施した。

表 8　インタビュー項目（2013 年 12 月実施）

①　日本ビーチバレーのこれまでの方針
②　トップチーム強化に関する施策
③　選手へ対する保障
④　選手発掘、育成に関する施策
⑤　国際大会誘致、および国内大会開催について
⑥　2020 東京へ向けた取り組みについて

第 2 項　分析方法

インタビュー内容から、それぞれの回答を要約しキーワードを抽出した。

第 6 節　日本におけるビーチバレー情勢に関する調査

第 1 項　川崎マリエン施工担当者へのインタビュー調査

2008 年に開設された川崎マリエンビーチコートに関する経緯、および設置目的について、施工担当者へインタビュー調査を実施した。インタビュー内容、および実施日は表 9 の通りである。

表 9　インタビュー項目（2013 年 9 月実施）

①　川崎マリエン設置までの経緯
②　ビーチコートの目的
③　現在の利用状況
④　今後の活用について

第 3 章　研究結果

第 1 節　世界各国におけるビーチバレー動向

第 1 項　ビーチコート設置状況

過去 10 年間（2002 年～2012 年）における FIVB 主催ワールドツアー開催地の立地条件についての結果である。世界の開催地状況を下の図に示すように、①内陸部会場（図 6）、②沿岸部特設会場（図 7）、③自然海浜会場（図 8）の 3 つに分類して調査を行った。図 5 はその比較データである。52%の会場では、主に都市部にある公園やテニスコートといった場所に砂を持ち込み特設のビーチバレーコートを設置し開催する、言わば沿岸部ではない内陸部で開催されていることがわかった。沿岸部においても、海岸線の自然砂浜を利用せず陸地のスペースに特設の会場を設置して開催する特設会場を加えると、全体で 71%の会場が自然砂浜を利用しない会場で開催されていることがわかった。

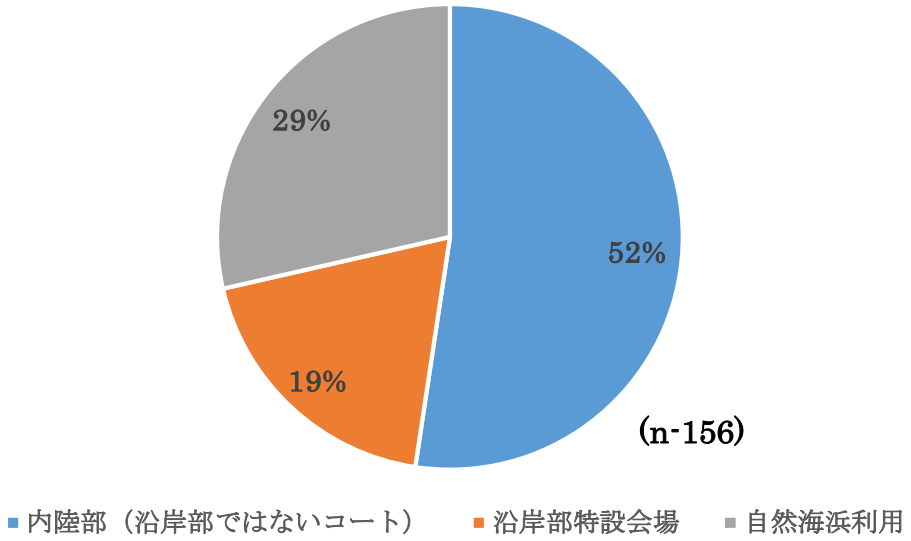

図 5　FIVB ワールドツアー開催地状況

図 6　内陸部会場

図 7　沿岸部特設会場

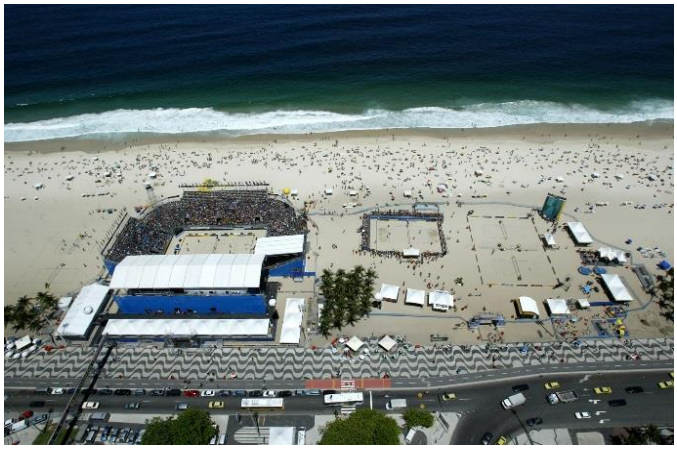

図 8　自然海浜会場

第 2 項　海外ビーチバレー選手におけるビーチコート利用状況

表 10 は海外選手へのアンケート調査の結果である。インターネットによるアンケート調査を行い計 17 か国の選手から 49 の回答数の回答を得られた。普段使用するビーチバレーコートの設置状況を、前述した 3 種類のコート設置状況のもとに調査した結果、アメリカ、ブラジル、スペインの三カ国の選手は、自然海浜コートのみの使用と回答した。他の国の選手においては内陸部コートのみの使用、もしくは自然海浜コートと併用の回答を得た。一方、日本においては、通常自然海浜のビーチコートが一般的である。

表 10　海外におけるビーチバレーコート設置個所別利用状況

ビーチバレーコート設置個所を 3 種類に分類			
	自然海浜コート	内陸部コート	併用
AUS	―	○	○
AUT	―	―	○
BRA	○	―	―
CAN	―	―	○
DEN	―	―	○
ESP	○	―	―
FIN	―	―	○
FRA	―	○	○
POL	―	―	○
USA	○	―	○
その他の地域	―	○	―
JPN	○	―	―

第 3 項　ロンドンオリンピック出場選手におけるジュニア大会経験

2012 年のロンドンオリンピックには男女各 24 チーム（各 48 名）の選手が出場している。図 9 は 2012 年ロンドン五輪男子出場選手におけるジュニア世界選手権出場記録を表している。FIVB 主催のジュニア世代の世界大会参加経験のある選手がオリンピックに出場している割合は 31%であることがわかった。CEV（ヨーロッパ連盟）が主催するジュニア大会も含めると、全体で 48%の選手がジュニア世代から世界大会に参加していることがわかった。

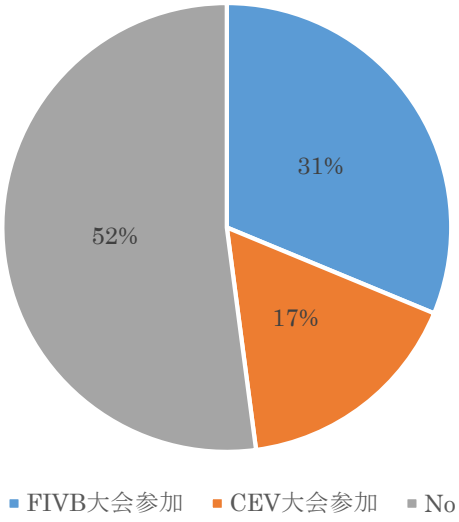

図 9　2012 ロンドン五輪出場選手における、ジュニア世界選手権出場実績（n -48）

このビーチバレーボールジュニア世界選手権は 2001 年より開催されるようになったため、図 9 のグラフではジュニア年代の時期にはジュニア世界選手権自体が存在しなかった 1980 年以前に生まれた選手も含まれている。そこで次に 1980 年以前に生まれた選手（48 名中 28 名）に限定し、ジュニア世界選手権の経験歴を調査してみると（図 10）、53%の選手がジュニア大会に参加していることがわかった。さらに、CEV（ヨーロッパ連盟）が主催するジュニア大会も含めると、全体で 64%の選手がジュニア大会に参加していることがわかった。

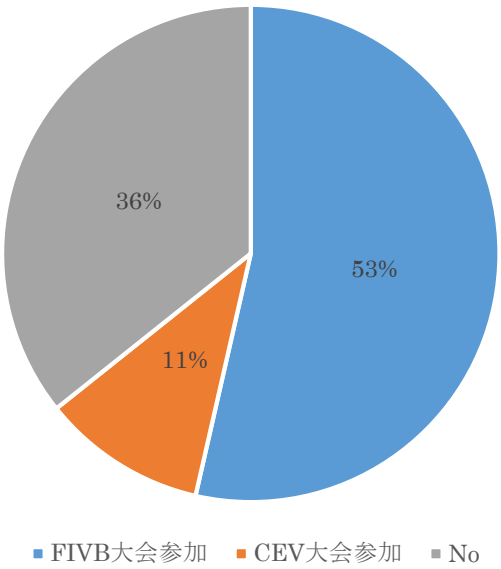

図 10　2012 ロンドン五輪出場選手のうち、
1980 年以降出生者におけるジュニア世界選手権出場率(n -48)

図 11 は、2012 年ロンドン五輪出場チームにおける各国のトップチーム順位と、その国における過去 10 年間のジュニア大会参加実績（5 回以上参加）を表したものである。順位と大会参加実績には高い相関関係が見られた(r=0.647, p=0.002)。ジュニア大会に多く出場している国が、結果として五輪出場権を得て、上位に進出していることがわかった。日本は 2010 年より本格的に参戦している。

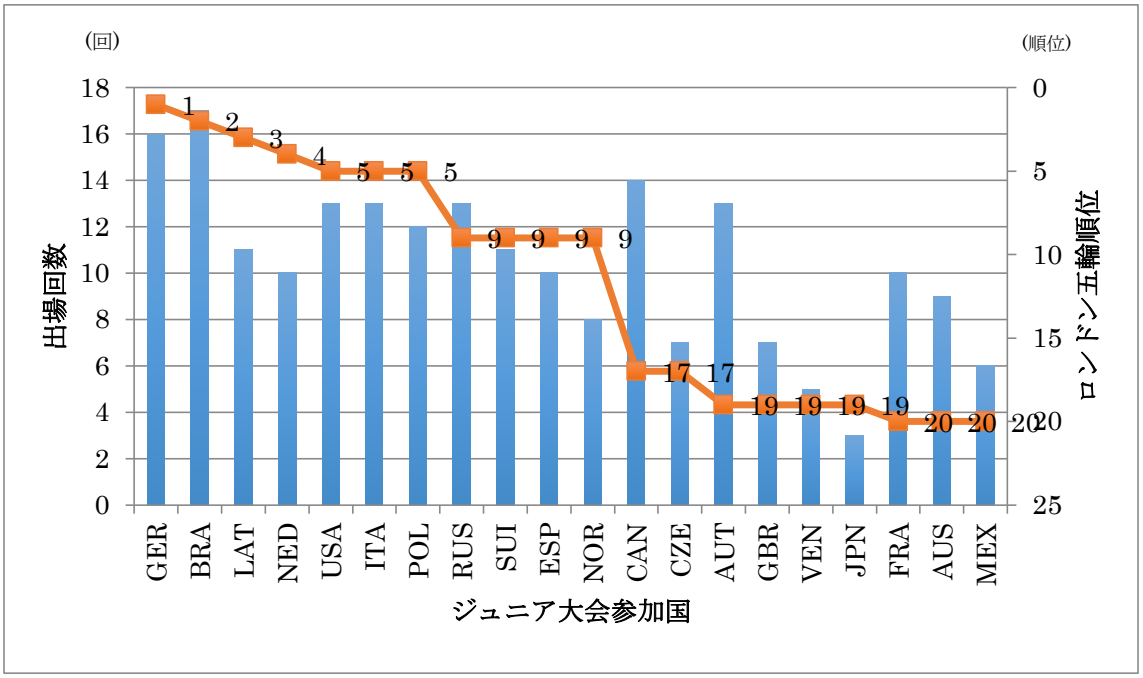

図 11　過去 10 年間のジュニア世界選手権出場国における、2012 ロンドン五輪成績

第 4 項　海外ビーチバレー選手における競技意識

ビーチバレーをプレーする上で、筆者が重要と思う要素について海外選手を対象にインターネットによるアンケート調査を行った。図 12 はインドアバレー経験がある選手のうち、インドアバレー経験の中で、ビーチバレーの技術に良い影響があると思われる要素の結果である。インドアバレーにおける技術では、パスの動作をもっとも重要と認識し、続いて、アタック、戦略およびメンタルの回答が得られた。

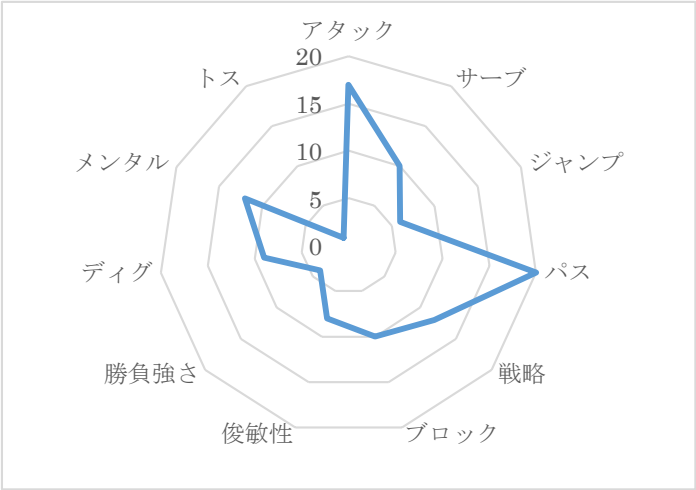

図 12　ビーチバレー選手が重要と感じる、インドアバレーでの経験(n-50)

次に、図 13 はビーチバレーの強化、普及発展に重要と思う要素を表した結果である。技術面、競技を取り巻く環境、普及に関する策に関して選手自身がビーチバレー強化おいて、スキル(技術的要素)、ビーチバレーに関する資金を重要と感じていることがわかった。

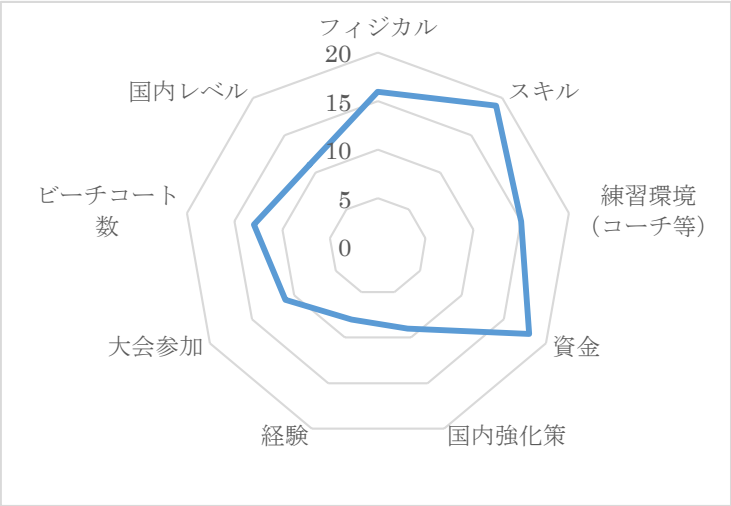

図 13　ビーチバレー選手における、強化に関して必要と思う要素について(n-50)

次にビーチバレーを始めるきっかけとなった理由を表した結果である（図 14）。ビーチスポーツへの興味がもっとも多く、続いてインドアバレーとビーチバレーの両立、続いて身近なビーチ環境の回答があった。

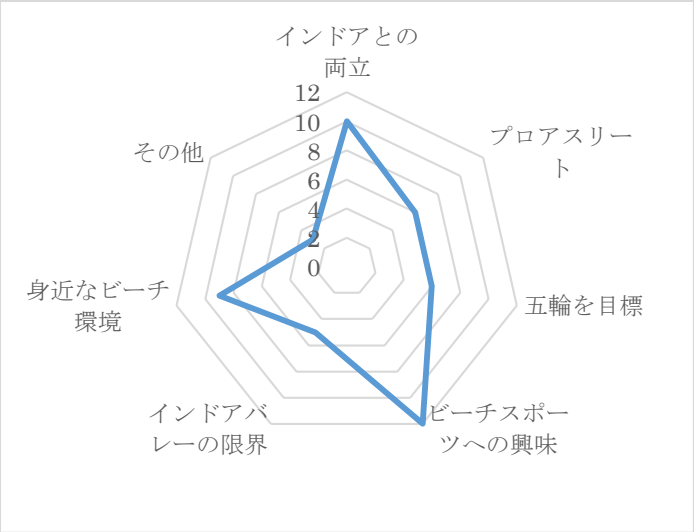

図 14　ビーチバレーを始めたきっかけ(n-50)

第 5 項　Xue 選手（中国）へのアンケート結果

下記に示す表 11 は Xue 選手のアンケート結果からビーチバレーの目標、および動機に関して 3 要素を得て、それぞれの回答にある自由記述を要約し抽出したものである。1 位の回答にインドアバレーではなくビーチバレーを選択したことが自分への挑戦と語っている。

表 11　Xue 選手のビーチバレーでの目標、動機

１・アスリートとしての挑戦
インドアバレーと比較し、まだアジアでは市場の小さいビーチバレーを選択したことは自分への挑戦である。
２・夢の実現
夢は一歩一歩積み重ねて実現するものであって、きっかけがあり一歩を踏み出したらあきらめない限り夢の実現は時間の問題に過ぎない。
３・五輪出場
自分の国を代表してオリンピックへ出場することが最高の栄誉と感じる。

次に、表 12 は Xue 選手のビーチバレーに対するイメージや、競技特性についての自由記述回答からコードを要約し、キーワードを抽出したものである。ビーチバレーは戦略的思考が重要であり、その上での試合展開が魅力の一つと語っている。

表 12　Xue 選手のビーチバレーの競技に対する見解

コード	キーワード
・対抗戦のため、全面的な戦術思考の必要性 コート上では指示を受けることが無いため、自分とパートナー二人だけで考え、対応するため選手の独立的思考が問われる。	・高い鑑賞性のある競技
・テレビ中継においても決勝戦のみ、かつ中国においては開催地域に限った放映 ・メディアの取り上げが少ないことで、スポンサーが付きにくく、よって選手への賞金低い	・低いメディア露出
・ビーチバレーと比較し、より保障がつくインドアバレーを志す選手が多く、ビーチバレーの優秀な選手発掘の妨げになっている。	・選手待遇向上の必要性
・中国ではプロ練習地以外、一般向けコートはほとんど存在しない。人は興味をもって取り組むことで上達を果たし、さらに上を目指す気持ちが芽生える。ビーチバレーの興味を育て、多くの関心を持ってもらえて愛されるようになれば、本当の意味で受け入れられたことになる。	・国内での普及

第 2 節　日本におけるビーチバレー状況

第 1 項　日本のビーチバレー選手経歴

日本のビーチバレー選手に、インドアバレー経験についてアンケート調査を行った。図 15 は高校生全国大会出場、および大学選手権出場選手の 21 歳以下の選手の回答である。95%の選手が、過去にインドバレーの経験があることがわかった。

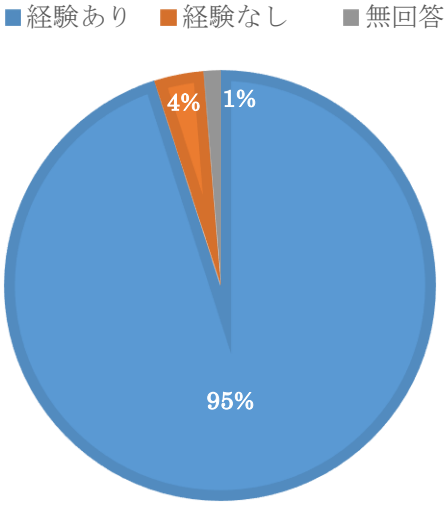

図 15　21 歳以下選手における、インドアバレー経験率(n-81)

図 16 は、ビーチバレー日本選手権に出場した一般男女選手のアンケート結果である。99%の選手が、過去にインドアバレー経験があることがわかった。

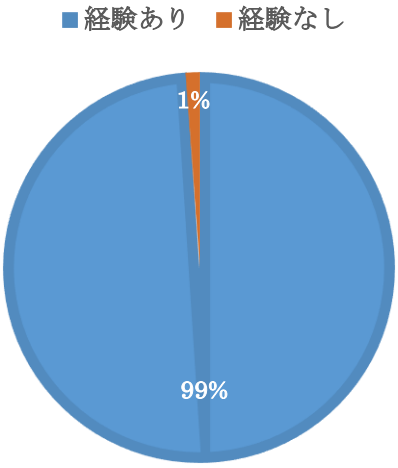

図 16　ビーチバレー日本選手権出場選手における、インドアバレー経験率(n-177)

次に、図 17 は 21 歳以下のビーチバレー選手の海外大会への参加経験を表している。99%の選手が海外大会の経験がないことわかった。

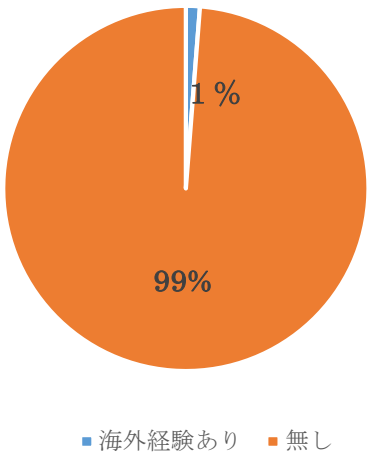

図 17　21 歳以下の選手における海外大会参加経験率(n-81)

次に、一般男女選手について海外参加経験を表した図である（図 18）。26%の選手が海外大会へ参加経験があることがわかった。

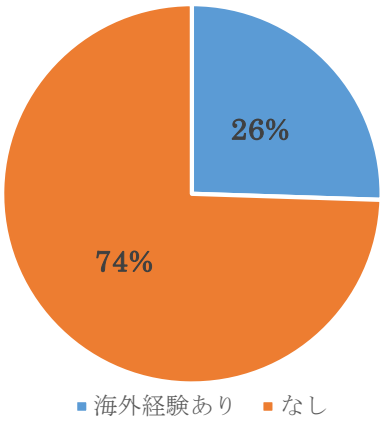

図 18　ビーチバレー日本選手権出場手における海外大会参加率(n-177)

第 2 項　オリンピック出場経験のある日本人選手の意識調査

1996 年から正式種目となったビーチバレーでは、過去 5 大会のうち男女計 12 名の選手が出場している。その中から 7 名へアンケート用紙による意識調査を行った。表 13 はビーチバレーを始めた理由についての回答を要約し記したものである。ビーチバレーを始めるきっかけとして、競技体験（高橋氏）、ビーチバレーの魅力、オリンピック出場、などがあることがわかった。

表 13　ビーチバレーを始める理由

ビーチバレー競技を始めるきっかけは何でしたか？
・海外でのビーチバレー体験から興味をもって。
・大学バレー部時代のビーチバレー大会参加を経て。
・オリンピック出場を目指して。
・ビーチバレーの魅力を知って。

次に表 14 は選手として掲げる目標の回答を要約したものである。オリンピックへの挑戦、身体的克服、自己実現のため（瀬戸山氏）、国内でのビーチバレー普及（高尾氏）などがあることがわかった。

表 14　選手としての目標、動機

自身の選手としての目標は何ですか？
・低身長での挑戦
・オリンピック出場
・自己実現のため
・ビーチバレーの普及
・インドアバレーより、オリンピックへの可能性を感じて

次に表 15 は日本ビーチバレー強化に関して必要な要素として、海外でのトレーニング、ジュニア育成などがあげられた。特に多かったのは国内のビーチバレー状況の改善であり、大会開催の充実、ジュニア世代の発掘、育成などの回答が得られた。

表 15　日本の強化に関しての意見

日本強化のために必要な施策、要素は何があると考えられますか？
・海外でのハングリー精神の醸成
・ジュニアの育成
・国内大会の充実
・練習量の確保
・有能なコーチの存在

砂を使用する競技に関しての設問に対しては、インドアバレーと比較して衝撃の軽減、安全性などがあげられた（表 16）。

表 16 砂を使用する競技について

自身の経験から、砂を使う競技についてどのように考えますか？
・インドアバレーより衝撃が少なく、怪我の予防になる
・自然との一体感
・安全性の確保
・砂の状態により、戦術、動きが変化する

次にビーチバレー競技の特性、特徴の回答を要約し記したものである（表 17）。ビーチバレーの特性として、ファンに魅せる競技である、プロスポーツ、メンタルの重要性などの回答があった。

表 17　ビーチバレーの特性

ビーチバレーの特性についての考えを聞かせてください。
・競技を通じて賞金を獲得できること
・ファンを喜ばせるショー的要素が強い
・プロアスリートとしての活動
・メンタルが大きく影響

次に、各選手の背景についてアンケート調査を行った結果である。図 19 はビーチバレー、インドアバレーの経験年数を表している。それぞれの選手がインドアバレーにおいて、レベルの高い所属チームで数年単位のインドアバレーを行っていることがわかった。（カッコ内は、インドアバレー選手時代の所属チームを表す）

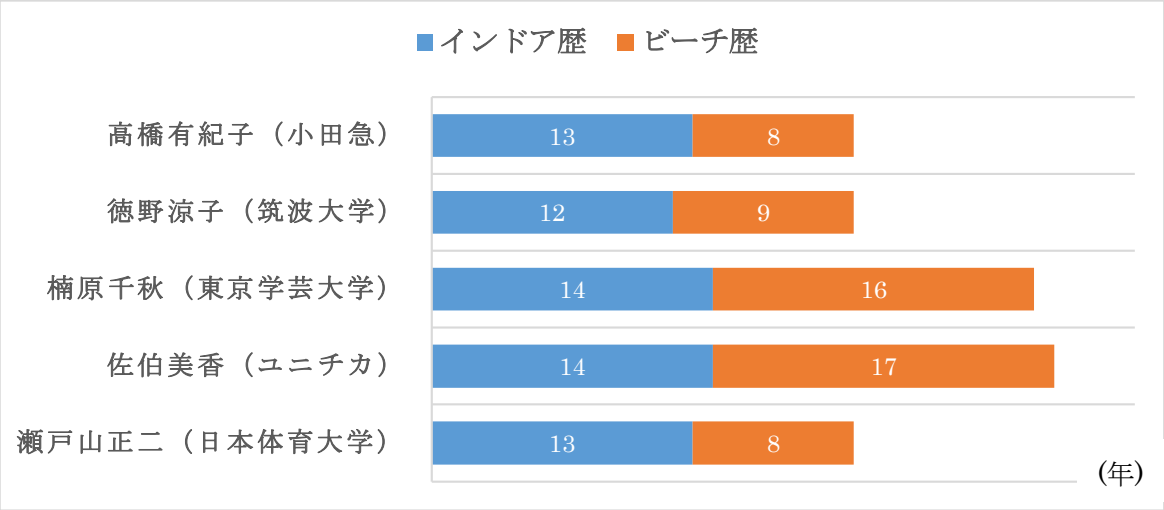

図 19　ビーチバレーでの国内五輪出場選手におけるインドアバレー歴の内訳

図 20 は各選手の強化に関する実績を表した図である。シーズン中 11 回以上のワールドツアー参戦していることがわかった。強化合宿においては全員の選手が 60 日以上の合宿を行っていることがわかった。

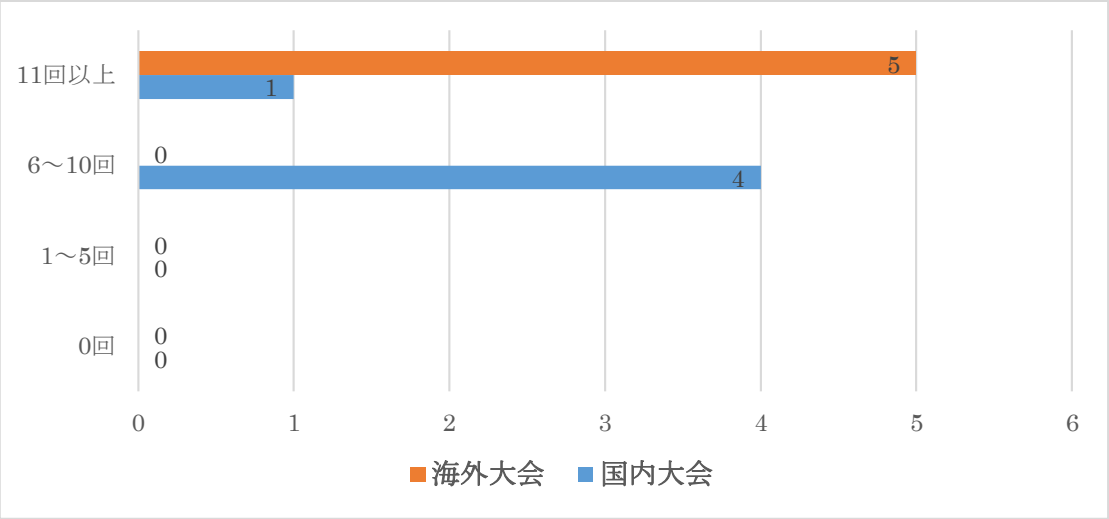

図 20　五輪出場選手における、シーズン大会参加数

表 18 は五輪出場選手へのアンケート調査の中で、海外強化に関する必要な要素に対しての自由記述の回答からキーワードを抽出した結果である。各選手とも海外での経験を重要視しているのがわかった。高いレベルでのプレーを求める、海外での技術、戦略についての情報収集、選手自身のレベル測定などを目的とすることがわかった。

表 18　海外強化の重要性

海外で強化を行う利点、必要性についての回答	
異国の文化、言語への対応（徳野）	日本にはない高さ、パワーへの対応訓練（徳野）
自身の実力測定・世界レベルの認知（佐伯）	国内レベルの低さ（楠原）
情報収集（高尾）	トップレベルとの差の認識（瀬戸山）
海外選手に対して弱い（白鳥）	ハングリー精神の醸成（高橋）

第 3 節　ビーチバレー組織分析

第 1 項　三カ国比較

過去、オリンピックを開催したオーストラリア、中国と日本との組織比較を行った。中国に関しては 2008 年北京を頂点に世界ランキングの上昇がみられる。オーストラリアに関しては、2000 年シドニーの開催以前より世界でも高いレベルあったため、比較の対象とした。1996 年アトランタを開催したアメリカに関しては、独自のビーチバレー市場を持つため除外した。2004 年アテネ開催のギリシャ、2012 ロンドンを開催したイギリスに関しては、ビーチバレー状況の好転を認識することが出来ず除外した。

日本、中国、オーストラリアにおける各組織に関する文献調査を行った。以下の表 19 は各国の競技団体の資金資源となる部分を調査し比較表に記した。各国とも国の資金が流入していることがわかった。

表 19　3 か国における競技団体の資金について

国名	内容
日本	文部科学省より、トップアスリートに対する支援の充実など、スポーツ振興に取り込んでいる。「競技力向上ナショナルプロジェクト」などを通じて、ターゲットである 24 種目へ資金支援。
中国	１、国家体育局からの予算、各種目を管轄するそれぞれの「運動管理センター」への配分。 ２、スポーツくじからの収益金
オーストラリア	スポーツを所管する行政機関オーストラリア・スポーツコミッション（ASC）を通じて、公式認定された競技統括団体 NSO に統括されるスポーツ団体に、4 種類の国際競技力向上されるための支援資金を配分する。

中国におけるスポーツの財源は、主に二つのチャネルから調達されている。一つは国家のスポーツ事業に対する財政支出であり、もう一つはスポーツくじからの収益金である
中国のスポーツ政策は、国務院の中央スポーツ行政組織である「国家体育総局」を中心にスポーツに関する法令、計画および制度などを整備して体系的且つ計画的に実施されている。財政面では、1994 年にスポーツくじ管理センターが設置され、スポーツ財源の確保が図られた。

次に表 20 は各国の以前の資金に関する流れを記したものである。母体でもあるバレーボール協会本体からの資金流入があることが確認された。

表 20　過去の資金に関する流れ

国名	内容
日本	バレーボール協会からビーチバレー連盟へ、強化費として組織運営上の予算を得ている。
中国	資金が国家体育局からバレーボール運動管理センターへ流入し、管理センターの主導で、インドアバレーと割り振る。
オーストラリア	オーストラリアバレーボール協会への流入後、ビーチバレー協会へ割り振る。

次に表 21 は各国のビーチバレーに関する施策施行後の資金に関する流れを記したものである。中国に関してはビーチバレーの独立した組織が設立され国家体育局から直接資金が調達されるようになった。オーストラリア関してはビーチバレー国家センターを立ち上げ組織の独立が確認された。以上のように資金、運営に関しての変化がある事がわかった。

表 21　競技団体における施策後の資金流入の変化

国名	内容
日本	日本においては、通常の強化予算の提供。施策変化なし。
中国	2003 年、バレーボール運動管理センターの元に、「ビーチバレー部」が設置される。国家体育局から直接資金の提供が開始。例年より 3000 万円余り増額。その後、1 億円近くまで増額する。
オーストラリア	2005 年 7 月に、オーストラリア国立スポーツ研究所（AIS）がオーストラリアバレー協会（AVF）と連携し、AIS／AVF アデレードビーチバレー国家センターを立ち上げ、練習環境改善や選手個別に対して実施する合宿や国際遠征のための「スカラシップ（コーチ育成支援等）」を実施。

第 2 項　中国との強化策の比較

表 22 は、中国と日本の強化に関する施策を比較したものである。中国では幼少期よりバレーボールを開始し、15 歳前後に競技管理者より適性を判断され、ビーチバレーへ選抜が行われる。その後ナショナルチームに選抜されると、段階的な強化合宿、ワールドツアーへの積極的参戦と管理される立場になる。競技環境に関しては、活動拠点が国内に 15 か所あり、季節、状況に応じて施設利用している。2008 年に、三亜において国家チーム基地設置し、あわせて住宅の建築を含めておおよそ 3 億円の経費がかかっている。

一方、日本の選手発掘に関しては、20 歳前後を対象とした講習会の実施、年齢制限のある全国大会の実施で、ビーチバレー競技を行える機会を創出している。ナショナルチームに関しては、強化委員会において、監督人事、選手選抜を行う。1 月～3 月に強化合宿を国内外で行い、4 月ごろからシーズンインする。競技環境は、2011 年に JOC 認定の強化拠点が設置された（川崎マリエン）。

表 22　海外との強化策比較

	中国	日本
トップ選手発掘	中国では、多くのバレー選手は 11 歳から 12 歳頃インドアバレーを始め、14 歳から 16 歳頃に技術やコンディションの優れた選手が専業隊（体育局のプロチーム）に選抜され、給料をもらいながら、インドアバレーかビーチバレーの練習に当たる。 国家チーム選手は大抵バレー生涯の初期に専業隊から選抜される。その後すぐ、ビーチバレーの練習も加わる。	高校生、大学生対象の講習会の開催、および各年齢カテゴリーの大会開催。
ナショナルチーム年間スケジュール	国の気候特徴を基づいて段階を分けて、シーズンの練習パターンを決める。 第一段階　冬キャンプ 第二段階　海外短期留学キャンプ 　　アメリカ強化合宿の開催 第三段階　ワールドツアーへの参戦	強化委員会において、監督、スタッフ、強化選手の人選を行う。4 月から 11 月まで開催されるワールドツアーへの派遣。オフシーズンに強化合宿の開催。
競技環境	国家チーム、省チーム、解放軍チームを含める強化キャンプが广西省桂林、海南省海口市、广西省北海市にトップチーム専用キャンプ地で行う。沿岸部 10 箇所にツアー戦用の常設コートがある。2008 年には 3 億円の予算で、ビーチバレー専用施設を建設	JOC 認定の川崎マリエンでの活動。2012 年コート面数、トレーニング施設の増設を行う。

第 4 節　ビーチバレー連盟関係者インタビュー結果

第 1 項　日本ビーチバレー連盟におけるこれまでの方針

ビーチバレー連盟の行う施策のうち「競技普及を図る」、「職業としての確立した選手の創出」の 2 点に重点を置いて運営されてきたことがわかった（表 23）。

表 23　日本ビーチバレーのこれまでの方針

コード	キーワード
1・コートの常設化のために、海岸利用規制緩和のため国土交通省との協議	・競技普及
2・普及を目的とした 4 人制大会のルール統一	
3・国体種目成立への働きかけ	
4・組織化されていなかった大会運営から、JVB プロツアーを開催し、プロ選手としての活動の場、賞金大会とし競技を仕事として確立させる。	・職業としての確立

海岸利用規制緩和の一環として、2002 年より東京都港区お台場においてビーチバレー一般大会の開催がスタートする。それに合わせて、2005 年より JVB ツアーが組織され、プロ選手の国内ツアーが開催される。国体に関して、1997 年大阪なみはや国体から公開競技として開催されるが、会場設置の問題もあり以降不定期に開催されていたが、2019 年茨城国体より正式種目として認定された。

第 2 項　トップチームに関する施策

2000 年前後までの女子選手の環境の充実、女子中心の強化から、男子強化へ注力を始める。2008 年よりジュニア世代の強化を開始したことがわかった（表 24）。

表 24　トップチーム強化に関する実施施策

コード	キーワード
1・2000 年前後、男女選手間に、環境およびレベルの差が存在していた。愛媛県松山市ダイキヒメッツビーチバレーチームを中心に、競技環境の充実が、2000 年シドニー4 位の成績につながる。以降、2004 年アテネ、2008 年北京と女子チームは連続出場を果たす（2000 年、2004 年男子不出場）。	・2000 年前後女子選手の躍進
2・2000 年以降、北京へ向けた男子強化を図る。強化費をトップチームに注入し、結果北京 9 位。	・男子強化へシフト
3・2008 年以降、シニア担当配置し、川崎マリエンの強化拠点認定、およびジュニア強化を行う。	・ジュニア強化開始

第 3 項　選手へ対する保障

プロスポーツ選手としての試合演出、ファン獲得のための施策や、メディアへ注目度を挙げる施策を実施したことがわかった。（表 25）。

表 25　選手に対する保障に関する施策

コード	キーワード
1・プロ競技としての試合演出、舞台設定を行う（賞金、セレモニーなど） 2・ファンや、メディアに注目してもらいやすい試合会場の選定 （お台場、名古屋市などの都市圏での大会開催） 3・露出を担保し、スポンサーメリット、選手価値の創出を図る。	・プロ選手としての価値の向上

第 4 項　ビーチバレー選手発掘、育成に関して

選手発掘に関しては、これまでインドアバレー選手へ向けた施策を実施してきたことがわかった（表 26）。過去、日本でのビーチバレーオリンピック出場経験のある選手達もみな、インドアバレーのキャリアからの転向である。ビーチバレーに携わるきっかけは様々である。高校生世代のインドアバレー選手が安心してビーチバレーに取り組める環境作りが重要と考えていることがわかった。

表 26　選手発掘、育成に関する施策

コード	キーワード
1・インドアバレーから転向、もしくは両立のために目的の明確化 ・オリンピック・代表チーム・プロ選手としての金銭的価値 ・ジュニア世代に対して、チャネルの多様化。 ・若い世代の受け皿を安定化する。 ・インドアバレー選手を対象に、ジュニア大会開催、体験スクールの開催などで若い年代でビーチバレー体験の機会を創出。	・インドアバレー選手の召喚 ・若い世代の受け皿としての環境づくり ・学校対抗戦の実施
2・今後、学校対抗戦の大会を開催し、学校単位でのビーチバレー参加機会を創出してはどうか。	・ジュニア育成に関しては施策無し

第 5 項　国際大会誘致、および国内プロ大会開催について

1990 年代、各都道府県バレーボール協会主催のビーチバレー大会の単独開催から、2005 年よりプロツアーとして組織化し、運営を開始したことがわかった。今後はアジア地区の大会誘致を目指していくこともわかった（表 27）。

表 27　大会開催について

コード	キーワード
1・国内大会の充実。2005 年からスタートした JVB ツアーの充実を図る。 2・アジアツアーでの活躍が不可欠であり、アジア上位を視野に入れ、ナショナルフラッグも下、ビーチバレーを応援する風土を醸成していく。	・アジア内での上位進出を目指す大会作り
3・国際大会誘致に関しては、コストが 2 億円から 3 億円かかるため未定・	・国際大会未定

第 6 項　2020 東京へ向けたビーチバレー育成、強化について。

2012 ロンドン大会で男子優勝チームであるドイツを例に挙げ、国内レベルの成長が金メダル獲得の理由だと認識していることがわかった（表 28）。日本においてもトップチームの輩出が不可欠であり、そのための施策が重要であると語っている。

表 28　2020 東京に向けた日本ビーチバレーの今後

コード	キーワード
1・ロンドン五輪で男子優勝を収めたドイツは、国内のビーチバレー普及が非常に高く、ドイツ選手のワールドツアーでの活躍が目立つ。 2・自国での盛り上がりは不可欠で、ワールドツアーで上位入賞を果たせるトップチームの誕生に期待している。	・自国の盛り上がりが不可欠

第 5 節　ビーチコートと環境に関する調査

第 1 項　国内における全国大会出場手の環境への意識アンケート調査

日本選手に対して、環境意識についてアンケート調査を行った結果、53%の選手がビーチバレーを始めてから環境への意識が変わったと回答した（図 21）。

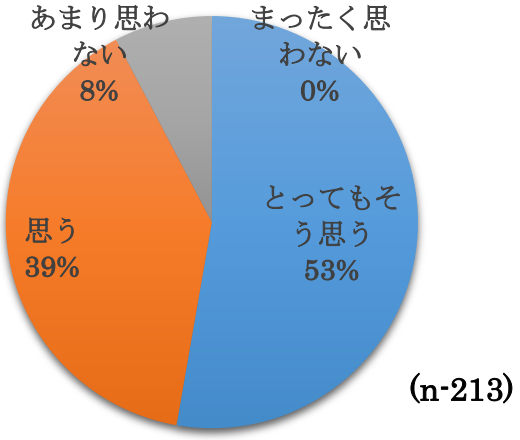

図 21　ビーチバレーを始めてから、環境へ対する意識に変化はありましたか？

回答の「とってもそう思う」に肯定的意見である「思う」を加えると、92%の選手が競技を通じて環境へ対する意識に変化があったと回答していることがわかった。

次に、ビーチバレー競技時にコート、コート周辺のビーチ清掃活動をしているかの質問に対して、78%の選手が清掃活動を行っていることがわかった。管理者、関係者に促されればやっていると回答した選手は 10%であることがわかった（図 22）。

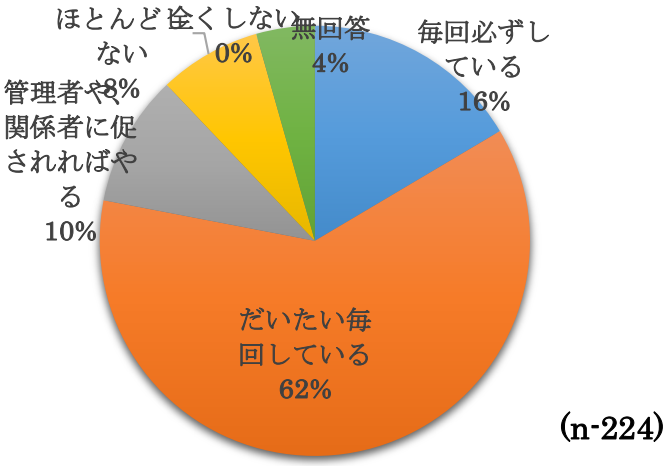

図 22　ビーチバレー競技時に清掃活動をしている。

次に、ビーチバレー選手へ対して、ビーチコートに必要な条件の質問に対して、以下（図23）の結果が得られた。日頃から利用している選手は上位3点に良質な砂、景色、スポーツ利用を重要視していることがわかった。日本におけるビーチバレー競技環境において、天然海浜を利用する事が多く、海浜の砂、環境への意識、スポーツをする場所などへの意識が高いことがわかった。

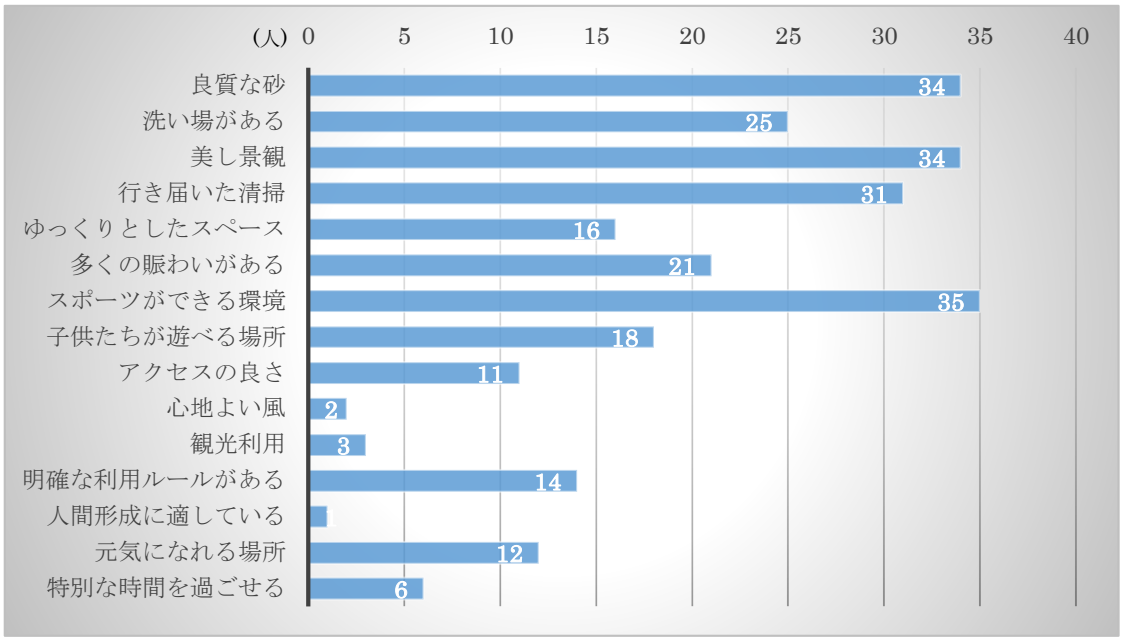

図 23　ビーチコートに求める条件

第 2 項　川崎マリエンビーチコート事例インタビュー結果

図 24 は川崎マリエン施設の写真を表している。下記に示す表 29 は川崎マリエンの概要である。

図 24　川崎マリエン施設写真

表 29　川崎マリエン施設概要

川崎マリエン施設概要
・市民と川崎港の交流を深めるため川崎市によって造られたコミュニティー施設の愛称。
・体育館、テニスコート、バーベキュー場、会議室などの機能をもち、2008 年、施設敷地内に川崎マリエンビーチコートが設置される。

以下は、前述した川崎マリエンビーチコート施工に関わる当時の担当者である橋本伸雄氏へのインタビュー結果である。

川崎マリエンビーチコート設置にあたり、まず周辺地域での変化があげられる。港造成のために埋め立てを続けてきた川崎市は砂浜が存在していない背景があった。その中で、港づくりの一環として公園が整備され港に砂浜が復活し、下記の表 30 に示すように、砂浜と親和性のあるビーチコートへの理解が得られる結果となった。一方で、隣接する東京都、横浜市にはない施設としての希少価値も認められた。

表 30　川崎マリエン設置までの経緯

コート設置までの経緯、および背景
・2008 年、川崎市に 50 年ぶりの砂浜が復活
・港づくりの一環として、公園の整備が進む。
・港湾振興とビーチコートとの親和性
・他の街に類を見ない施設としての価値

次に表 31 はビーチコートの利用目的の回答を記したものである。もっとも重要と考えられている点は、市民に親しんでもらうため、港を認知してもらうための施設である事がわかった。そのために、従来開催されている港まつりとビーチバレー大会の共催、利用による川崎マリエンの広報の役目も果たすことを目的としていることがわかった。

表 31　川崎マリエン利用目的

川崎マリエンビーチコートの活用目的
・港の勢い（港勢）を醸成するため
・市民への施設広報
・従来のイベントとの共催

施設開設後 5 年余りが経ち、川崎マリエンビーチコートは下記の表 32 が示すように、JOC 認定のビーチバレー強化拠点となり、2008 年以降毎年プロのビーチバレー大会を川崎市主催で市長杯の冠大会を開催している。

表 32　川崎マリエン利用状況

川崎マリエンの現在の利用状況
・アスリート利用のために、砂の入れ替えを行い強化拠点として、JOC の認定を受ける。
・2008 年北京五輪の影響もあり、以降ビーチバレー大会の開催の継続
・ナイターを増設して、利用増を図る。

次に今後の活用についての回答である（表 33）。競技スポーツであれば、行政ではスポーツ局が担当するものであるが、川崎マリエンではアマチュアの 4 人制大会、選手による体験教室を開催し、川崎マリエンを港湾局が管理を継続していく事がわかった。選手育成と同時に、幅広く開放し利用増を目指していく事がわかった。

表 33　川崎マリエンの今後の活用

今後の活用について
・スポーツ振興と並行して、川崎マリエン施設を港の振興として利用していく。
・ママさんバレー、子供たちへのアプローチを図り、幅広い層の市民へ解放を目指していく。

第 4 章　考察

本研究では、日本ビーチバレーボール界発展に向けた振興策を明らかにしたいと考え、調査を行った。考察においては、ジュニア世代の海外強化とインドアバレーとの共存、魅せるプロ選手の醸成、資金獲得による組織強化、ビーチコートが与える環境への好影響の 4 点について述べる。

第 1 節　ジュニア世代の海外強化とインドアバレーとの共存

ビーチバレーの強豪国へと成長した国と、日本との間には「ジュニア世代への強化」に大きな差があることが本研究を通して明らかになった。2012 年ロンドンオリンピック出場したビーチバレー選手は、ほとんどが 20 歳前後から U21 等の世界選手権で活躍した選手達である。一方、日本では若い選手の海外への遠征や大会への出場経験が諸外国の選手に比べ極端に少ない。これらの事実から、ビーチバレーのトップ選手の育成には選手が積極的に海外での経験を積み、世界のビーチバレーに触れる機会を増やすことが強化への施策だと示唆される。

次に、ビーチバレー選手のうち 90%がインドアバレーの経験があることが明らかになった。また、海外では、インドアバレーとビーチバレーを両立させている選手も多い。筆者もインドバレーでの経験は、ビーチバレーに大きく影響したと感じているし、多くの選手はインドアバレーの経験技術的要素、身体的特性が好影響を与えると回答している。これはプレーする場所は違うが同じバレーボールという競技で、ジャンプ動作、ボール感覚といった共通する点が多く存在しているからであると推測される。バレーボール競技そのものの高い技術を習得し、勝利を得ていくには相当の時間がかかるものである。今後、日本においてもインドアバレーとの共存を視野に入れたビーチバレーの推進が必要となってくるだろう。多くの選手はインドアからビーチへの転向であるが、ビーチからインドア、またはその両立をすることが日本のバレーボール全体を強くする可能性もある。なぜなら、ビーチバレーの技術、戦略といった部分が、インドアバレーへの新しい形をもたらすからだ。筆者もビーチを経験してからインドア選手へ指導する際、戦術のバリエーションが広がった。しかしながら、インドアとビーチの両立には多くの困難がある。指導者を含め、関係者の理解が重要であり、選手がビーチバレーとインドアバレー間の移行について柔軟に選択できる環境の整備を望むものである。

また、中国代表の XUE 選手は 12 歳からインドアバレーを開始し、14 歳からビーチバレーナショナルチームで活躍している。XUE 選手のバレー開始年齢は日本とほとんど変わらない。しかし、日本の場合、20 歳がビーチバレー開始の平均年齢である。日本でも中学生もしくはそれ以下の年齢からビーチバレーに親しみやすい環境を作ることが、競技力を高めるうえで優先すべきアプローチと推察される。

第 2 節　魅せるスポーツに関する選手および運営の意識向上へ

海外で開催されるビーチバレーの大会を見ると、会場には常に音楽が流され、試合開始前には DJ とチアリーダーが登場し観客を盛り上げる。さらに、試合が始まっても DJ の軽妙なマイクパフォーマンスと激しい音楽で会場を盛り上げている。

また、世界最高峰の舞台であるオリンピックにおいても、会場には大音量で激しい音楽が流されている。筆者は、そのような光景を目の当たりにし、他の競技にはないショー的要素を重視した、観客と共に大会を作り上げて行く競技であることを自覚していた。

過去オリンピックを経験した選手へのインタビューでも、ビーチバレーのショー的要素が認知度を高めていくうえで重要な要素であると考えていることがわかった。

しかしながら、10 年ほど前まで、日本の大会では海外のよう会場を盛り上げる演出は、ほとんど見ることが出来なかった。

そこで、日本ビーチバレーの変遷を振り返ってみると、この数年、ビーチバレーボール連盟は、選手のプロ意識を高めることに力を注いできたことがわかった。2005 年からは、全ての大会にスポンサーが付き、選手へ報酬を支払うプロツアーを実現させた。これを機に、日本の大会でも海外のような DJ が登場し、軽妙なマイクパフォーマンスで観客を楽しませ、激しい音楽で会場を盛り上げている。このことは、連盟がプロツアーにおける集客の重要性を理解していることを示唆するが、魅せる競技であるという観客の認知度は未だ低く集客の大幅な増加にはつながっていない。

トップアスリートの技をみせる楽しさ、ファンとの距離が近く会場に DJ や音楽を導入させた楽しい雰囲気が、ビーチバレーの魅力である。そのため、今後は、他競技とは違ったビーチバレーならではの観戦の楽しみ方を伝えていく必要があると考えている。

連盟も、大会において選手に最高のパフォーマンスを発揮してもらうため、選手に代わってスポンサー獲得作業を行っている。

選手自身もビーチバレーがショー的要素、鑑賞性の高い競技であり、観客と一体になって大会を作り上げる競技であることは認識しているが、今後は、今まで以上にファンへのサービスを意識して行う必要がある。選手とファンが共に作る大会が、ビーチバレーへの憧れを抱かせ、有望選手の発掘や若い選手への刺激につながり、日本のビーチバレー界が盛り上がると考えている。

そのうえで、選手のスポンサー獲得が加速するよう、プロ選手の登場回数が増えるような環境作りが運営者には求められると考察する。

第 3 節　資金獲得による組織強化

日本と中国、オーストラリアなどの諸外国の組織運営を比較すると、各国の競技団体組織に関しては、公的資金がバレーボール協会を経由することなく、直接ビーチバレー競技団体へ提供されるようになり、バレーボール協会の一部としてではなく、ビーチバレー競技団体が独立した運営を行っている。その結果、競技団体主導による環境の改善や強化策を打ち出すことが可能となり、選手のレベルを押し上げている。さらには、国家的施策やスポーツ振興策など国を挙げた支援につながり、公的資金が拡大している。

一方で日本は、バレーボール協会の中にビーチバレー連盟が属しており、独立した組織運営が出来ないのが現状である。資金に関しても、バレーボール協会を経由し提供されるため、思い通りの普及促進や強化策を実施することが出来ない。2005 年から開催されているプロツアーに関しても、その運営は外部組織に委託され、独自での運営は出来ていない。

こういった現状から、中国の国家的施策やオーストラリアのようなスポーツ振興策などを今後さらに研究し、日本ビーチバレーの振興策を模索していく事が重要である。

さらに、日本においてもビーチバレー連盟が独立しないまでも、バレーボール協会から自立した組織運営を行っていくことが、普及と強化につながると考えている。

そのためには、組織運営を行える経営感覚を備えた人材の育成も必要である。

第 4 節　ビーチコートが与える環境への好影響

現在、ビーチバレーを取り巻く世界の現状を見てみると、ビーチバレーが開催されている会場の約 70%が内陸部に位置している、日本国内ではビーチが存在する海辺の地域のみで行われるものという印象が強いと想像されるが、世界においては海辺ではない「都市部」でのスポーツとして認知され、海が無い国や地域においても数多くの大会が開かれていた。

ロンドンオリンピック男子優勝国は海岸線をほとんど持たない国であるドイツであった。これは、国内の公園やスポーツ施設の中に数十面のビーチバレー施設が何カ所も点在しており、国内プロリーグも高い競技レベルを誇っているなど国内でのビーチバレーの盛り上がりが勝因の一つと推測される。したがって、日本でも川崎マリエンのビーチ施設のような内陸部でも、地域振興、都市のブランディング、健康増進などを目的としてビーチバレーコートが増えていくことがビーチバレーの普及に大きな役割を果たすと推察される。また、アメリカでは、都市部のスポーツ施設利用の例として、アリゾナ州フェニックス市およびその近郊ではプロスポーツを中心とした都市開発，カリフォルニア州サンディエゴ市では環境資源を活用したレクリエーショナルスポーツを中心とした観光産業が存在ており、スポーツは都市開発，環境問題，障がい者問題など社会の様々な側面と結びついている。

筆者は、ビーチバレーを通じ、はだしで砂に触れることで自然環境と密接に関わり、環境へ対する意識が大きく変化した。

また、ビーチバレーボールの選手に対するビーチ環境への意識調査の結果から、海岸部、内陸部に関わらず、ビーチバレーコートの存在がビーチコートやその周辺にある自然環境に対する意識の向上に寄与していることが推測された。ビーチバレーの普及だけでなく、環境への意識向上という目的からもビーチバレーコートの設置を働きかけることは極めて重要であり、その土地の人々の環境配慮の意識を高めることに有効であると考えられる。

本研究はビーチバレーボール振興策について考察したものであったが、ビーチバレーボール選手に限定して研究を進めたため、ビーチコートを利用する一般の人々の意識等については調査することができなかった。この点が本研究の課題であり、今後はトップ選手だけではなくビーチを利用する一般の人々も対象に調査研究を進めていくことが求められる。

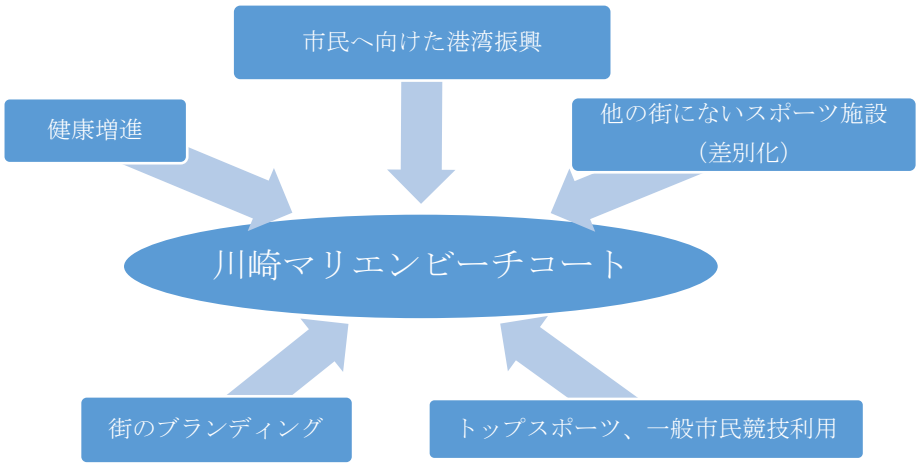

図 25　川崎マリンビーチコートにおける利用価値

第 5 章　結論

ビーチバレーは沿岸部、および内陸部においても砂のコートさえあれば競技を行うことが可能であり、沿岸部以外にもそのような場所を作ることや、日本の広い海岸線を守るためにもビーチバレーコートが海岸に常設されることが、環境配慮の意識を向上させ、日本のビーチバレーの普及と勝利に有効な方策であることがわかった。

今後の日本バレーボール界において、身近な場所でビーチバレーを体験し、世界を目指す若い世代の選手たちの背中を後押しすることが必要であり、鑑賞性の高いトップスポーツとしてのビーチバレーの発展を2020東京五輪へとつなげ、さらに競技を通じて地域や環境面への貢献の促進に寄与することが重要である。

第 6 章　謝辞

本稿の執筆にあたっては、実に多くの方にご協力やお力添えを頂きました。関わって下さった皆様へ感謝の意を申し上げます。

本研究の当初から、指導教員である平田竹男教授には多大なるご指導を頂きました。ビーチバレー競技の世界から引退をしたばかりの私に新しい世界を一つ一つ丁寧にご指導き、また新たな学びと競技へのさらなる興味を持つことができました。これからの日本バレーボール界への恩返しをしていく第一歩となり、平田教授に心より感謝の意を申し上げます。同様に、違った視点から貴重な助言や示唆を頂きました副査の中村好男教授、研究対象者へのアンケート作成から、論文技法に至るまでご指導頂きました副査の児玉有子先生へも深く感謝申し上げます。また、早稲田大学院研究科において、ご指導頂きました教授および講師の先生の皆様へも御礼申し上げます。

そして、平田研究室 8 期同級生のみなさん、修士 2 年制の三澤翼氏、久保谷友哉氏、山本亜雅沙氏、李トウフウ氏と共に一年間過ごした時間は大変貴重なものでした。8 期生の結束が力となり、最後まで研究を続けることができました。心より感謝致します。また、本研究にあたり、家族の存在が何よりの支えでした。改めて、感謝を伝えたいと思います。

第 7 章　引用、参考文献

1. 森田淳悟；永田俊勝；松村茂（1996）『日本男子ビーチバレーボールオリンピック代表センスの体力』
2. Robert Smith（2008）『砂の上を動く：ビーチバレーのトレーニングのヒント』
3. 董立（2006）『中国女子沙滩排球实现 2008 年奥运会夺牌目标的战略思考』
4. 李世明（2005）『试析排球运动员从室内排球转打沙滩排球后运动知觉的重建』
5. 大久保英哲；櫻井貴志（2009）
『企業スポーツチームの運営と指導に関する研究 ： 企業バレーボール
チームにおけるマネジメントを事例として(1)』
6. BeachVolleyball　Database　http://bvbinfo.com/
7. オーストラリアバレーボール協会　http://www.avf.org.au/
8. 国際バレーボール連盟　http://www.fivb.org/EN/BeachVolleyball/
9. 文部科学省　「中国のスポーツ制度」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/__icsFiles/afieldfile/2011/08/03/1309352_018.pdf
10. 文部科学省　「オーストラリアのスポーツ制度」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/__icsFiles/afieldfile/2011/08/03/1309352_015.pdf
11. 日本バレーボール協会　http://www.jva.or.jp/
12. 日本ビーチバレー連盟　http://www.jbv.jp/
13. 川崎マリエン　http://www.kawasakiport.or.jp/index.html
14. 漆原　良（2001）『立命館産業社会論集』 第４６巻第４号 ２０１１年３月
15. 公益財団法人　日本体育協会　http://www.japan-sports.or.jp/